輝く学年団を訪ねて

学力多層化の現状を丁寧に分析し、自律した学びを目指して指導を更新

宮城県柴田高校　2学年団

地域の少子化が進み、2020年度高校入試では、普通科、体育科ともに志願倍率が1倍を下回った同校。入学生の学力幅が非常に大きい中、各学力層に対して適切な支援を行うことで、すべての生徒の夢を実現する学年づくりを目指し、学年団は動き始めた。

直面した課題

◎入学生の学力の多層化が課題となっていた。特に、学力上位層の学習意欲を喚起し、高い志望を実現するために、指導の改善の必要性が高まっていた。

◎ＩＣＴを活用し、個に応じた教科指導を充実させる中で、生徒に主体的に学習に取り組む態度を育むという新たな課題が見えてきた。

学校概要

「自律・敬愛」「英知・創造」「忍耐・強靱」を校訓に掲げ、創立以来、６千余名の人材を送り出してきた。特に、スポーツにおいては、普通科・体育科の別なく、これまでに日本代表選手、国民体育大会・全国高等学校総合体育大会優勝選手、複数のプロ野球選手を送り出してきた。2021年には、野球部が第93回選抜高等学校野球大会に出場を果たした。部活動が活発な同校では、地域貢献活動も部活動単位で行っており、運動部による近隣の小・中学生への技術指導、文化部による施設訪問、さらに生徒会主導による駅周辺や通学路の清掃などのボランティア活動に取り組んでいる。

設立　1986（昭和61）年

形態　全日制／普通科、体育科／共学

生徒数　１学年約160人

2021年度進路実績（現役のみ）　４年制大は、福島大、東北学院大、宮城学院女子大、東京国際大、国際武道大、日本体育大などに64人が合格。短大・専門学校進学51人。就職38人。

生徒一人ひとりの実態を把握し、学年団の指導の目線を合わせる

宮城県柴田高校では、近年、同校への志願者数の減少を背景とした入学生の学力の多層化が課題となっていた。20年度1学年主任となった佐藤瞬先生は、学力中下位層の生徒への支援はもちろん、学力上位層への指導を充実させる必要性を感じていた。

「どの学力層の生徒も、自分の目標の実現に向けて行動できるようになってほしい。生徒に必要な指導を明確化するため、まずは生徒の実態を把握しようと考えました」

新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業が明け、生徒が登校を再開した20年6月、1学年の全4クラスで「目標設定ワークシート」（P.42図1）の記入に取り組ませた。同シートは、現在の自分を、性格、学力の面から分析した上で、高校卒業時の自分のありたい姿を描き、その実現のために何をすべきかを生徒に逆算して考えさせるというものだ。20年度1学年団でクラス副担任を務めた小野寺浩子先生は、同シートを用いた生徒理解の成果を、次のように説明する。

「現時点での自分の強みや得意なこと、さらに苦手なこともワークシートに書き出した上で、これから自分はどうありたいかを考え、それをスローガンの形で表現させました。これからの自分を筋道立てて表現できる生徒もいれば、目指す進路がぼんやりしていて表現力に乏しい生徒もいて、同じ学年でも生徒の現状は多様なのだと実感しました」

6月に記入した同シートの内容と7月の定期考査の結果によって、生徒の学力が多層化している状況を、学年団で共通理解することができたと、佐藤瞬先生は振り返る。

「学力や進路意識、表現力など、生徒を多面的に把握した結果、一斉指導を充実させるだけでなく、生徒一人ひとりに応じた指導を工夫していこうという機運が高まりました」

ICTを活用して、学力層別に学習を支援

幅広い学力層への対応として、1学年団は7月から、「Classi学習動画（＊）」の配信を開始した。配信を希望する生徒を学力レベル別に3つのグループに分け、各レベルに合わせた国語、数学、英語の学習動画を毎週2、3講義ずつ配信した。クラス担任の北郷剛先生は、生徒の学びに向かう姿勢の変化に手応えを感じた。

「例年、指導が後回しになりがちだった学力上位層の生徒は、レベルの高い学習動画を

リーダーに聞く！5つのQ&A

Q どのようなチームを目指しましたか？

A 目的と手段が明確に共有され、ワクワク感を持って、成果を出せるチームです。

Q リーダーとして心がけていることは？

A ゴールから逆算してするべきことを考え、率先垂範で取り組むことです。また、学校は閉鎖的でなく、社会にシームレスにつながっていると意識しやすい環境をつくろうとしています。

Q 学年団としての「成功」は？

A 生徒と教師が自分らしくいられる日々を過ごし、卒業式の日に、「柴田高校に進学してよかった」と、1人でも多くの生徒が言ってくれること。

Q リーダーとして自覚する長所は何ですか？

A スピード感です。よいと思ったことはすぐに取り入れますし、この学年には合わないと思ったことはすぐに軌道修正します。

Q リーダーとして自覚する短所は何ですか？

A ほかの人に任せられずに、つい自分で物事を進め過ぎることです。そのため、同僚に仕事を適切に配し、全員が当事者意識を持って業務に向かえるよう、マネジメントすることを意識しています。

＊「Classi」は、株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。そのうち、「Classi学習動画」には、義務教育の範囲から高校の教科書の範囲まで、約12,000本の解説動画を搭載。

視聴することで、『日々の授業についていけているから大丈夫だと油断してはいけない』と気がついたはずです。また、学力下位層の生徒は、『基礎レベルからやり直していってもよいのだ』と安心感を得たと思います」

12月には、Classiの新機能「学習マップ連携課題配信」を活用し、各生徒に、ベネッセのアセスメントの結果に応じて自動的に選定された課題を配信した。さらに、1学年団では、冬季休業中の5教科の課題についても、3つの学力レベル別で準備するなど、各学力層に対応した学習支援は順調に進んだ。だが、佐藤瞬先生は、生徒たちの様子に新たな課題を感じ取っていた。

「ICTを活用することで、生徒の学力に応じた課題の提供が可能になったのは大きな進歩でした。ただ、その一方で、課題が与えられた状況で学ぶことがやや常態化してしまい、生徒の自律を妨げていると考えるようになりました」

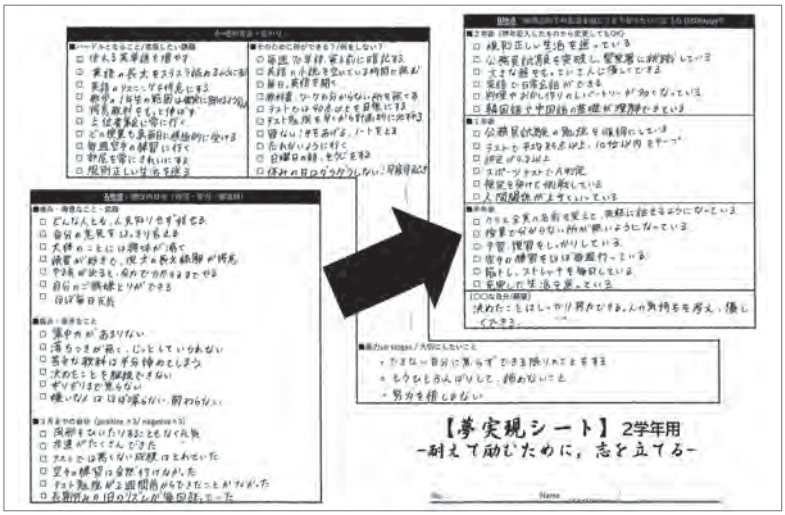
生徒一人ひとりに合った課題提供がICTによって可能になった今、自分たち教師ができること、力を入れるべきことがあるのではないか……佐藤瞬先生が出した答えは、教師が生徒と対話する機会を増やし、自律して学習に取り組む態度を生徒に育むことだった。

「2学年に持ち上がってすぐ、学年団の先生方に『チューター制自主学習サポート』という取り組みを提案しました。それは、4人の副担任と進路指導部長、そして私の計6人の中から、チューターとして『この先生に学習の伴走をしてもらいたい』という教師を生徒が選び、自ら学習の進捗や課題を報告し、時には悩みを相談しながら学習を進めるものです。担任や部活動顧問とは異なる立場で高校生活を支えてもらえる第三の関係を生徒が自分でつくりながら、自律した高校生活を過ごしてほしいと考えました」（佐藤瞬先生）

「チューター制自主学習サポート」には、2学年の生徒の4分の1が参加を希望し、6人のチューターは2～10人の生徒を受け持った。生徒は、「個人学習Management Sheet」（**図2**）に、どの教科を、何を使って、どれだけ学習したのかを記録し、チューターと共有する。チューターの1人である進路指導部長の佐藤祥（やすし）先生は、毎週、職員室で1人10分程度、生徒と面談をしているという。

「生徒は、『今週は部活動を優先したので、

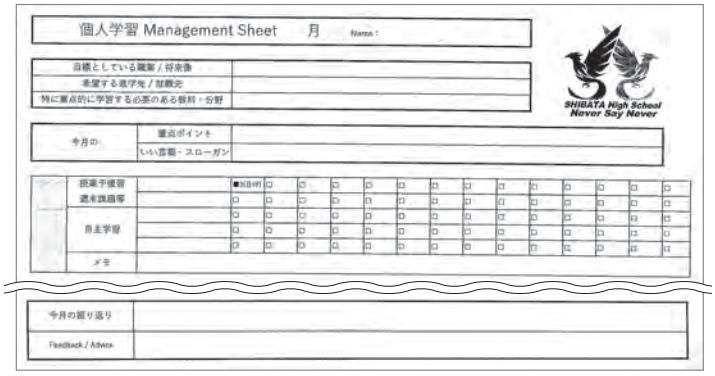
図1　目標設定ワークシート



佐藤瞬学年団では、1年生6月、2年生4月に、全クラスが「目標設定ワークシート」の記入に取り組んだ。生徒が記入した目指すゴールとそれを達成する高校生活を、教師は生徒理解の材料として活用した。

※学校資料をそのまま掲載。

図2　個人学習 Management Sheet



「チューター制自主学習サポート」に参加する生徒は、学習状況や希望進路などを本シートに記録し、チューターの教師と共有する。

※学校資料をそのまま掲載。

来週は勉強を頑張りたい』とか、『最近こんな進路に興味を持っている』などと、いろいろなことを話してくれます。教師との対話を通じて、自分の現状を確認することで、主体的に学習に取り組むことができています」

生徒、教師双方に自分をデザインする力を育む

2年生2学期を迎えた生徒たちに、学年団の教師たちはそれぞれ手応えを感じている。

2学年主任
佐藤 瞬（さとう・しゅん）
教職歴10年。同校に赴任して6年目。英語科。

主幹教諭・進路指導部長
佐藤 祥（さとう・やすし）
教職歴31年。同校に赴任して2年目。数学科。

2学年担任
小野寺浩子（おのでら・ひろこ）
教職歴36年。同校に赴任して7年目。家庭科。

2学年担任
北郷 剛（きたごう・たけし）
教職歴7年。同校に赴任して3年目。理科。

特に、学力上位層の生徒の変化は顕著だ。

「私は今年度、学力上位者が多いクラスの担任を務めていますが、放課後、生徒が教室に残って自習するなど、今まではなかった姿が見られるようになりました。2年生9月の段階で、ほぼ全員が志望校を決めています」（小野寺先生）

佐藤瞬先生は今後、すべての生徒に自分のことをデザインする力を身につけさせたいと考えている。学力上位層の生徒が、「もう自分にはチューターの支援は必要ありません。1人で大丈夫です」と言ってきたり、チューター制に関心を示さなかった生徒が、「私もサポートしてほしい」と申し出たりと、自己変革の一歩を踏み出すことを期待している。

「生徒だけではなく、私たち教師も、さらに自己変革を続けていきたいと思っています。2学年でクラス担任を務めることになった小野寺先生は、『以前、他校で担任を務めた時に、学力下位層に手をかけた一方で、学力上位層には十分な指導ができなかった。だから、今年度の2学年ではクラス担任を務めたい』と、ご自身の意志を私に伝えてくれました。教師としての自分の課題を掲げ、前に進もうとする小野寺先生は、まさに自分をデザインする力を発揮していると感じました。教師の姿勢は必ず生徒に伝播します。デザインする力で、多くの生徒・教師が自己変容を促せるような学年団を目指していきたいと思います」

先生方が前を走る学校をつくる

土生善弘（はぶよしひろ）校長

本校では、公募制で学年主任と分掌部長を任命しています。それゆえ、校長の私は、「自分の力で学校を変えよう」という気概を持つ先生方を全力で支援します。先生方が校長よりも先を歩こうとすることで、学校改革が進んでいくのです。

学年団 輝きのポイント

- 生徒の実態を丁寧に把握したことで、学年課題への共通理解が図られ、学年団が一丸となって指導に取り組めた
- 指導改善の手応えが得られても、さらに改善すべき点はないか、学年団で自問自答を続けた